

Dombey and Son の Edith に見られる Dickens の女性観について (1)

Dickens' View of Woman Studied in Edith in *Dombey and Son* by Charles Dickens

嶋田 貴美子
Shimada Kimiko

キーワード：資本主義社会、唯物論的思考、傲り、威厳、金銭、自然、不自然

1

Dickens の小説は、同じ Victoria 朝のものであっても後の George Eliot⁽¹⁾ などの小説に見られるように、人間の心理に深く切り込みそこに哲学的な思索を見出すことは目的としてはおらず、当代の社会状況の中で悪戦苦闘して生きる実に雑多な人間模様をアイロニーを込めて描き出すことに終始している。従ってそこには今述べたように以後の作家の中に見られるような知的議論が乏しいという、読者を含めた批評家達の大方の批判もあるが、しかしそれにもかかわらず彼らは総じて Dickens を「偉大な作家である」とみな⁽²⁾し深い敬意を払っていることも事実なのであり、Tolstoiに限っては、Dickens を「Shakespear 以上の大作家であるとほめ、彼の作品にならって作品を書いたほど⁽³⁾」であった。それは Dickens の、自己の小説に登場させる登場人物の外面的描写が極めて緻密でリアリスティックであることと、まるで演劇を見ているような、その登場人物ならではの生き生きと躍動する動きと会話⁽⁴⁾にその理由があるのである。具体的に言えば Dickens は並はずれて長大な自己の小説の中に、実に多くの人物を登場させているが、主人公に限らず端役のそのまた端役にいたるまで、細密画を見ているような描写を怠らず、彼のペンになるやいなや彼らはたちまち当代の具体化された実在となって小説の舞台に動き出すのである。そしてその動きは無駄がなく確実に留まるところを知らない。それら外面的な緻密な描写と、その動きと彼らの当意即妙な会話とは、すなわち演劇の世界のものであって、作者の側での難解な心理描写をしなくても、彼らの心理と性格は読者の側に十分理解できるほどにまで高められる。そしてこの dickens の特色が先に述べた Dickens に対する Tolstoi の賞賛の根源を成すものであったに違いないが、とりわけ女性を描く時の Dickens の筆は更に冴えて、個性の強い女性の周りに現実の枠を起えた妖気すら漂うことがしばしばある。その妖気は Dickens が透徹した視点からたどる、女性の究極的な内面から発せられるものであり、女性

が霊的な高みにまで高められたことの証しであって、それがすなわち Dickens の女性蔑視ではないことは明らかである。

しかし本論文のテーマにかかわる *Dombey and Son* 中の Edith については、並はずれて個性の強い女性の一人として Dickens はこの小説の中で彼女の描写を妥協せず、完璧な Edith 像を描き切っているのであるが、*Dombey and Son* 以外の小説の中においても登場する女性の描写のすばらしさとは別に Dickens の持つ女性観については否定的な意見を述べている批評家も少なくない。特に小池滋氏は Dickens の作品の *Barnaby Rudge*⁽⁵⁾ を引き合いに出して、「本篇中の女性はろくな人間がない。それこそディケンズは女性呪詛の『悪魔にとり憑かれた』のではないかと思いたくなるほどである」がしかし幸いにして「ディケンズのお膝元たる国の女王と女首相⁽⁶⁾『鉄の女』が、かかる女性侮辱の張本人 Dickens の全作品を禁書にせよ、と叫んだとは聞いていない⁽⁷⁾」と皮肉混じりに言い、持論を転回している。果して Dickens は小池氏が述べているとおりの女性観を持っていたのか、そして Edith もまた Dickens の「女性侮辱」の意識において登場してきた女性であるかどうかということに筆者は大きな関心を持つ者である。本論文では Edith という女性を中心に、Edith と同様にある一つの執念に燃える *Great Expectations*⁽⁸⁾ の Miss Havishan と Edith との比較において筆者なりの Dickens の女性観を究明したい。

2

Dombey and Son の主人公 Dombey 氏が 40 歳半ばを過ぎた初老期に到って 30 歳にも手が届かないほどまだ若い絶世の美女 Edith を旅の行き掛かりに見初めてすぐさま再婚を決意し、Edith が彼の求婚を受け入れたことは Edith の実在を知る上で看過できない重要なでき事であった。そしてそれはまた彼女と Dombey 氏双方のゆゆしい思惑の上に成されたことだけに、最初から波乱含みのものであったことは否めない。結婚が双方の意志によって成り立つものである限り Dombey 氏と結婚を決断した Edith の動機を探るためにはまず Dombey 氏の側が Edith に求婚した動機を見てみる必要がある。つまりその時の彼の中には華麗な過去と現在と、そして未来へのあくなき願望が渦を巻いていたのだ。

Dombey 氏は 1840 年代の London の大商人、つまり London の City 内の、王立取引所や英国銀行のすぐ近くにある今をときめく貿易商社「Dombey 父子商会」の二代目社長である。「天地は『Dombey 父子商会』が商いをするために創造され、太陽や月はその商会を照らすためにつくられたものであった。川や海は彼らの船を浮かべるためにできているのであり、虹は彼らに好天を約束した。……星や惑星は彼らを核とする体系の聖なるままの軌道を回った⁽⁹⁾」のであった。このような商会のありようとその状況の中で当然身についた傲慢な恐れを知らない Dombey 氏の人となりは、1840 年代のイギリスの社会状況とうまく呼応している。つまり 18 世紀後半から始まった産業革命は当時になっていよいよその成果を発揮し、19 世紀半ばまでには近代資本主義社会⁽¹⁰⁾ が確立され、イギリスは世界で最も繁栄した国家となっていた。London のような大都市は立身出世の機会と夢があふれてはいたが、当時のイギリスの社会状況について

「『都市に満ちあふれているあらゆる文明の驚異を実現するためには、自分達の人間性の最良の部分を犠牲にしなげなければならない⁽¹¹⁾』」とエンゲルス⁽¹²⁾が言っているように、大都市での立身出世を実現させ自ら紳士となるためには、そのような近代資本主義社会における自由競争に打ち勝つことが必須であったのである。順風満帆の今をときめく「Dombey 父子商会」の二代目社長に君臨するほどまでになった Dombey 氏はまさに「人間性の最良の部分を犠牲にし」てその Dombey 王国とも言われるほどの莫大な財を築いた典型的な London 商人であったのである⁽¹³⁾。つまり Dombey 氏はその Dombey 王国の王として「Dombey 父子商会」に君臨し、この世で自分にとって自分以外の価値ある人間は自分の妻でも誰でもなく、「Dombey and Son」を名実共に充実させる幼い息子の Paul だけであって、殊の外美しく愛らしい娘の Flovence については「『ドンビー父子商会』にとって娘が何だ！ 商会の名声と威光への資本ということからすれば、女の子など一文の投資の対象にもならんさもしいはした金—ええい—こんなものよ⁽¹⁴⁾」と怒気を強めている。つまり Dombey は自分が人間であること、つまり human であることの属性をはるかかなたの過去に置き忘れて、今は自らが社長を勤める、地位と名誉と金が渦を巻く大貿易会社、「Dombey 父子商会」そのものの人格化としてそこにある。従って彼の中には「商会」(House) の更なる名声と繁栄と、「金また金」という冷徹な法則があるばかりで、「心」(hearts) などというものは自分のものはもちろんのこと、他の者の中にあるものですらむしろ排除されるべき邪魔者であったのだ。ところが Flovence は生まれながらに「いらない⁽¹⁵⁾」子として Dombey から疎外され、その豪華な邸においては、ただ優しいだけで常に夫の陰に隠れた存在感の薄い母の手一つで育てられたために、Dombey 氏の姉 Louisa が「完璧な⁽¹⁶⁾」Dombey として養育されたのとは異なって愛は深く、子供の持つ純真さと相俟って、Dombey が遠い昔に喪失し、そして現在も全く価値を置いていない「心」の権化として成長することになる。そのような Flovence であるから、Flovence の動向は彼女がまだ幼い娘であるということを超えて、Dombey 氏の中に negative な力を発揮し、何かにつけて Dombey 氏の傲った気持を刺激することになり、その結果 Dombey は彼女を徹底して疎外するようになっていくのである。

Flovence 出生の後五年ほどたってやっと生まれた嫡男 Paul の誕生は、人生最大の慶事として、心をなくした彼にしては珍しいほどの狂喜の感情をむき出しにした Dombey ではあったが、彼とその息子 Paul との関係も、すぐその後に登場する貧しい船具商 Uncle Sol と彼の甥である Walter との間に見られる読者を感動させずにはおかない暖かい肉親の情愛⁽¹⁷⁾などとはほど遠く、Paul は出生時にお祝にかけつけた Dombey の姉の Louisa が言うように生まれながらにしてまさに「金き Dombey⁽¹⁶⁾」であった。つまり Dombey 氏の父親が亡くなり永らく空白となっていた「Dombey 父子商会」(Dombey and Son) の父親と共にその「商会」を盛り立てるべき Son であったのであり、地位と名誉と金がすべての Dombey 王国の王子であったのだ。当然 Paul は「小さな紳士⁽¹⁸⁾」としての、また「商会」の更なる名声と繁栄を確かなものにするために「商会」に新たに加わった顔としての、五・六歳の子供にしたら極めて過重な「促成栽培」的な紳士教育を受ける⁽¹⁹⁾ことになり、そしてそれは遂に Paul を死へと追いやることになる。その Paul の死は巡ってとりもなおさず Dombey 王国の基盤の脆さを露呈するものであり、Dombey 王国の

近い将来の瓦解の兆しともなったのである。

つまり *Dombey and Son* のこの story は、当論文の 2 章でも記した通りの、順風満帆で今まさにこの世の春を謳歌していたまばゆいばかりのこの Dombey 王国の完全なる瓦解と、それと一体を成す Dombey 氏の、地位、名誉、金で成りたっていた倨傲と威厳の世界の瓦解、それから更に死生をさ迷う期間をやっと越えた果てに到達した人間としての再生の物語なのであることを考慮すると、Paul の出生で更に輝きを増したかに見えたその王国も、Paul の母親の Fanny が早々に亡くなり身分の低い Mrs. Toodle を乳母として雇い入れなければならなかった Dombey 氏の屈辱に、もはやその瓦解の萌芽が認められるのである。更にその Paul 七歳での死とそれから間もなくして起った Dombey 氏の Edith との再婚という二つの大きなでき事を通じて Dombey は自己の破滅、すなわち「商会」の破滅に向かってひた走って行くのである。そしてこの Dombey 氏の破滅は人道主義者 (humanitarian) である Dickens が、唯物的な思考に凝り固まり、人間を人間たらしめる spiritual な側面のほとんどすべてを持たないばかりかそうしたものを身の回りから一才疎外している Dombey を紀要 31 号と 32 号で筆者が考察した *Christmas Carol* の Scrooge の場合と同様に道徳的な罪人⁽²⁰⁾ (Sinner) として弾刻し、そして彼を叫弾するために与えた罰なのであった。しかしその手始めとして Dombey の身近に起った大悲劇である Paul を失うという事態に至った今だなお、自分、つまり商会は世の栄華のただ中にあるという意識を捨て切れず、ましてや「商会」の破滅など思いの端にものぼせたことすらなかった Dombey 氏に対して、「驕れる者は久しからず」ということの実をかくも見事に悟らしめたのは Edith の功績に他ならない。運命の出会いから程なくして気が進まないながらも Dombey と結婚した Edith の本心はどこにあったのか、また Edith が Dickens によって sinner として位置付けられた Dombey 氏への罰となりうる要因はどこにあるのかを究明するために次の章では Edith の本性を見る。

3

Dombey と Edith との出会いは、息子の Paul が死に、今後の「商会」の更なる名声と繁栄の確信が露と消え、その不幸になかなか折り合えない Dombey 氏がイギリスの保養地 Leamington に Bagstock 少佐を伴ってやって来て二日目、散歩の途中で偶然行き合った Edith と彼女の母である Skewton 夫人とが少佐と旧知の間柄だったことにある。Skewton 夫人はもとより Edith もまたそこで初めて小説に登場することになるが、登場したとたん彼女は実に華々しい形容詞で八方の角度から入念に描写されることになる。つまり Edith は a proud and weary air (傲った、何事にも倦みあきているような雰囲気) を持ち、very haughty (非常に横柄) で、また very wilful (とても頑迷) であり、しかし very handsome (とても美しく立派な) 女性であった。物言いは scornfully (侮蔑的) で時には supreme difference (この上もない冷淡さ) がこもる。容姿は graceful (優雅) であり、背筋はしゃきっと伸び、彼女の美しさは言わば proud Beauty⁽²¹⁾ (傲りの美神) とも言うべきものである。そしてまた別のところで Dickens は Edith の美しさに

ついで次のように述べている。

「Edith は今や以前にも増して美しくそして傲然とそのかたわらに立っていた。この婦人の美しさについて注目すべき点は、彼女があえてそうしようと思わないでも彼女の意志に反して美は自らを誇り自らがそれを確固としたものに見えているように見えた。彼女は自分が美人であるということは知っていた。知らないでいることなどとうていできないことであつたのだ。でも彼女は自らの傲りでまさに自分自身を否定しているかのようだった⁽²²⁾。

これを見ただけでも Edith がいかに並はずれた美人であり、そしてその美は、頭をつんと後にそらせて人を見下しているような、見るからに横柄でかつ無関心を伴った失礼千萬な女性の傲りとがない混ぜになった美しさであつた。彼らは一応貴族の出であるが、今は貧しく、Skewton 夫人の寡婦資産で細々と生計を立てている。それで女性 *Dombey* 版として Mrs. Skewton は Edith を最高の女性に仕立て上げ、自らの貴族としての誇りと品位を守り、貧しさから脱却し富の恩恵に浴することを可能にさせる紳士とその Edith との良縁を求めて目下あちらこちらの保養地を渡り歩く生活を送っているのである。しかし母親のこの目論見はまだ成功の目途がたないうちは当の Edith には何の感慨も持たらず、というより Edith は半ば母親のその教育に反抗心を抱きつつもそれに反対する強い主張も持ち得ぬままに、Edith と一時も離れて暮らすことのできない母親の言いなりになり、ただつき従っているだけであつた。この *Dombey and Son* の story の中にはこの Mrs. Skewton と Edith との関係と酷似した間柄にあるもう一組の母娘が登場している。London の場末のうす汚い路地の粗末な小屋で子供相手の追いはぎや物ごいやすりまがいのことで細々と生計をたてている Brown ばあさんと娘の Alice である。人となり一端の地位のあつた Brown 夫人の零落もあるにはあつたが、Edith といとこ関係にある Alice は、かつて、今や「商会」の *Dombey* 社長の片腕ともなっている総支配人 (Manager) である John Carker の慰み物にされた挙句、母娘共々そのような社会的底辺に追いやられるはめになつたのであつた。従つて今でも Alice は Edith の備えている美貌を彷彿とさせるものを持つてはいるが一昔前の彼女の美しさはまた格別であつて、Mrs. Brown は自らの零落した地位から Alice の良縁で救われることを切に願っていたのだ。従つて Alice は母親 (Mrs. Brown) に対してそして又「*Dombey* 父子商会」の Manager である Mr. Carker に対してたぎる怒りを感じている。これは Edith と母親の Skewton 夫人との間にある感情の行き違いの伏線ともなっているものであり、また *Dombey* 氏との結婚に際して Edith が爆発させた憤りの本源にも通じる興味深い対照を成している。

Edith は母親・Skewton 夫人に、Edith をだしに自分が富と地位を得るといふその目論見のために、Dickens が最も価値を置いている子供が持つ自然性に依拠した純真さや真実の愛や優しさなどの人間の本源的な資質 ("honest heart love") をすべて破壊し、子供の頃からずっと「一人前の女」(a woman) として「男の気を引く手練主管を持ち、わなに陥れる奸計⁽²²⁾」を巡らすようにしむけられてきたことに対して、*Dombey* の求婚を目前にした時、つまり Skewton 夫人がやっとこぎつけた成功を目の前にした時初めてその母親に対して大きな怒りを爆発させ

る。Edithは18歳の時やはり母親の強力な勧めで相手への愛も情熱もないままに41歳にもなるCoronel(陸軍大佐)と結婚したが遺産相続の権限が生じる一年間を待たずに夫が他界し、結局はただ寡婦という肩書だけが付された現在のみじめな自分の境涯も、母親が娘に与えた恥辱の一環であるとしてSkewton夫人を糾弾する。初めて露呈した母と娘の意見の食い違いはその母がEdithの中に落した今更消し去ることも取り返すこともできないぞつとするような陰の深さを露呈する。次に引用したのはDombeyがEdithに結婚を申し込みに来るという日の前夜のEdithとSkewton夫人との会話である。

「私達はお前が何とか良縁を手にするように最大の努力をしてきたんだよ。それがお前の人生だったんだよ。そして今お前はそれを手にしたんだよ」母は言った。

「市場のどんな奴隷だって競りにかけられるどんな馬だってこの恥辱にまみれた10年間(寡婦となつてから)の私ほど、見せ物にされ、値踏みされ、審査され、そして引き回されてきた者はいないでしょうよ、お母さん。」Edithは顔を真赤に染めながら、又しても例の言葉に力を込めた。「そうじゃありません？ 男つていう男の物笑いの種にされてきたんじゃ？ まぬけが放蕩者が、青二才が、老いぼれが私につきまとは次から次へと私を見限り私から去って行ったんじゃ？ 母さんの手口が余りに明々白々だったもんだから。そうよ、それでおためごかしの本性が見えちゃったもんだから。……英国中の保養地という保養地の半数ぐらいのところ、私はじっと黙って自由に見られたり触れられたりしてきたのじゃ？ 私は私の自尊心の最後のかけらも私の中で死にたえ、ひどい自己嫌悪に陥るほどにまで大声で呼び売りされそしてあちらこちら売り歩かれたんじゃ？ これが私の一番身近な子供時代だったんだわ。それ以外は何もないじゃない。私にも子供時代があっただなんてよりもよって今夜言わないでちょうだい」彼女は目をぎらぎらとさせながら言った。

「お前さえその気になりさえすりゃ、Edith、少くとも20回は首尾よく結婚できたかもしれないのに」と彼女の母親は言う。

「いいえ、誰がこんな私に価値を認めてめとってくれるものですか。この人がしているようにね。だから私は彼を誘うような画策は一切しないのだから。彼は私を競売で目にし、私を買うのも得策だって思ってるのよ。ならそうさせればいいんじゃない！私を検分しに――多分値踏みをしに――来た時彼は私のたしなみ事の見目録を見たがったわ。だから私は彼にそれを見せて上げたんだわ。彼が買ったものの正当性を部下に示すために、そのうちの一つを私に披露させようとしたら、彼にその中のどれをお望みでしょうかってきいて、それをやってみせるだけのこと。私はそれ以上のことは何もするものですか。彼は他でもない自分の意志で買い物をしたのだから。自分の価値観でね。それに自分の金の力に任せてね。これから失望することがなければいいのだけれど。…」彼女は頭を上げ、恥辱とたける傲りとで身をふるわせながら答えた。

……

「私はもうこの年になっちゃってるんですもの それにここまで落ちぶれてしまっているんじゃ、新しく生まれ変わるとか母さんのやり方にストップをかけて我身を救うなんてこともできやしない。乙女の胸を純化し、真実にして善良にするものはこれまで一つとして私の胸に芽生えることはなかったわ。だから私は自分自身がいやでたまらなくなっても何一つ私を支えてくれるものなどありゃしないの。」そういう彼女の声には悲しみの響きがこもっていた。でもそれは彼女が口をゆがめて話し続ける時までにはすっかり消えていた。「だから私達は生まれがいいのに貧しいのだから、こんな方法でも裕福に暮らさせてもらえることに私は満足よ。……⁽²³⁾」

「……」

「母さんは私があの人を愛しているとでもお思いじゃなくって？」彼女は部屋を横切りぎま足を止め、くると向きなおって言った。

つまり Skewton 夫人は地位はあるものの不遇の人生を送っている屈辱から脱するための最善にして最良の方法として、自分譲りでもともと非の打ちどころがないほど美しい Edith の婚姻に着目したのである。Edith に絵画やハーブや歌や他のもろもろのたしなみを深めさせさらにまた lady としての教育をすればするほど、母の野望はふくらんでいったのだ。そしてそれを Edith 自身も嬉しいこと有がたいことと思っていると信じ、それを疑ったことは一度もない。そして母によってそのように外面的には光り輝く高価な商品に作り上げられた Edith に、辺り一帯に富と名声できこえた Dombey 氏の目がとまったのだ。翌日 Dombey 氏が結婚を申し込みに来るといふその前夜の Skewton 夫人の中にわき上がった、やっとな報われたという人生の成功者としての感慨はひとしおのものがあつたに違いない。その反面 Edith の中ではそのような母親を前にすると、成長の過程でうすうす感じていた、母のその思惑が自分の中、人間の中に当然備わっている自然的本性を疎外し破壊してしまったという意識が鮮明に眼前に浮かびあがり、そしてそれはやすべてが取り返すことが不可能になってしまった 28 歳という今、やりきれない慚愧の思いがかつてないほどの強い力でわき上がったのである。しかし世の中のことが何もわからないうちから母親の目論見に乗せられ遂にそこまで辿り着いた今、母親は言うまでもなく自分もまた、Dombey が「自分の独得の価値観と金の力⁽²⁴⁾」だけで「私を競り落した⁽²⁴⁾」のであることをはっきりと知りつつも、娘である自分を Dombey 氏ほどの London の biggest man に嫁がせることが母親の人生の究極的な目的であるとしたら、それはまたそうとは知らないままに母親と同じ道を歩いてきた自分の人生の究極的な目的でもあり、Edith にはそれがいくら屈辱的なものであろうとも Dombey 氏の求婚を受け入れるより他にはこれから生きていく上での選択肢はないことがはっきりとわかっていた。つまり皮肉にも Skewton 夫人がしばしば口にする「自然」とか「心」とかいう言葉で表象される人間特有の感情がすっかり失われ、内面が介在しない所のそれだけの自分の持つ美貌と嗜みが商品となり値踏みされできるだけ高価なものとして買われていくことに至上の価値があるのだという自己認識は、乙女の域は脱したが、そういうことの一切を達観して考えることのできるほどの完成された女性になり切っていない 28 歳の Edith に、どれだけの屈辱と自己嫌悪の思いとを与えたことであろうか。その上 Edith のどうしようもない慚愧の思いや自己嫌悪や、すべてが negative で、positive なものを何も宿さない心の内や、また自分をそのような女性にした Skewton 夫人への Edith の滾る怒りのどれ一つをも、当の Skewton 夫人が理解していないことが Edith の内面の悲劇性をより強めているのである。一方 Skewton 夫人には、Edith が夫となる Dombey 氏の七光りであるその富と名声を我が物にできるとなれば、娘にとってこれ以上の幸せはないのであるし、当然娘と共に暮すことになる自分の、これまで喉から手が出るほど欲しかった富と名声の享受という側面からも、長年の夢が実現されるのであって、いわば母娘共に目ざしてきた人生が最高の形で成就されることを意味したのである。そしてこのことこそがこれまでその条件に添ったものであったら何であれ娘の身に着けてやってきた自分の唯一絶対の母の愛から成るものであるという考え方に何の疑問もさしはさむ余地はない。したがって上記の引用の中に見られるような Edith の思いもかけなかった痛烈な非難も、夫人のその処世観には何の陰も落とすことはなかったの

であった。

つまり *Dombey and Son* の story のテーマは、まずはそのタイトルが示すように Dombey 氏の息子 Paul に懸ける対社会的な更なる地位と名声の向上、そして「商会」の更なる繁栄と言った世俗的なものへのいや優る欲望と、その犠牲となって弱冠7歳で死んだ Paul の持つ人間の自然的な、そしてまた本源的な神秘性あるいは純粹性との拮抗として展開するが、その Paul は小説の極めて早い段階で亡くなってしまったために、それは Paul の死という「商会」にとってはかなり重たいものを持ちながらもこの小説のテーマを更に深く展開していく上での糸口を与えたに過ぎず、この膨大な小説のテーマの拡大深化のためには、Dombey にとっての Paul の死に勝るとも劣らぬテーマ性豊かなプロットと、折にふれて結論を示唆しそしてそれを裏付ける大小こもごもの話題が提供されなければならない。そしてまずその Paul の死を引き継ぐ最も大きな話題として、Dombey の不自然な思考パターンと、その父親とは全く相入れない、Paul と同様に子供の持つ天使のような純粹性と、特に弱者あるいは苦しみや悲しみを抱いている者に深い愛情を持つ娘の Florence との間の、Florence がどうしても乗り越えることができない壁についてのテーマがあり、そしてまたこの Skewton 夫人と Edith との間に見られる確執と彼らの運命、それから貧しくても互いの愛情と強い絆で結ばれている Sol おじさんと甥の Walter が住まう家、Paul の乳母の Toodle 家、先に述べた Mrs. Brown と娘の Alice との確執、それにもう一つ世ののけ者ながら互いに手を携えて生きる、「商会」の Manager である John Carker の弟の James Caeker とその妹の Harriet の兄弟愛などの話題が、世俗の欲望に汚れた者とそういう者とはほど遠く人道的に手厚い生き方をしている者とが、互いに相照らし合いながら Edith と結婚した Dombey の破滅的な運命とそれから彼の再生の結論を鮮明に示唆していくのである。

作者の Dickens は *Christmas Carol* の主人公 Scrooge から fantastic な部分を取り除き、Scrooge の持つ唯物的で非人道的な人生态度を引きつがせながら Dickens 独得の膨大な小説の主人公にふさわしい更に骨太で当時の London の大商人の特徴的かつ実に現実的な Dombey 像を *Dombey and Son* の中に現出させたのであったが、前に述べたとおり Scrooge に対しても Dombey に対してもそれぞれの小説の中で共に sinner と呼んでいるのは犯罪意識に敏感な Dickens にとって 1840 年代の当時のイギリス資本主義社会の富を貯えた資本家の中に多かれ少なかれ見られた唯物的なかつ非人道的な生き方に、もちろんそれは何ら刑事責任を伴うものではなかったにしろ、道徳的な罪人の像を認め、まずは *Christmas Carol* の中で恐ろしい亡霊と対峙させることによって子供にもわかる形で Scrooge のその罪の弾刻を行ったのであり、そしてそれだけではあき足らず、*Dombey and Son* の小説において更に大きくて複雑で暗く重たい罪を犯した Dombey を厳しく弾刻するのである。そうすることによって何とか社会を改良しようとした社会思想家である Dickens は当時の資本主義社会の弊害を徹底的に批判したのである。このようにみても *Dombey and Son* のテーマは、大まかに言えば紀要 31 号 32 号で論じた *Christmas Carol* の Scrooge の場合と全く同じように主人公 Dombey の Sin に対する罪とその後の改悛にあると言えるが、Scrooge が時と共に改悛の一途をたどっていったのは異なり、Dombey は時間と共により罪を深化させるのである。そして Dombey の Edith との結婚は

Dombey が犯した最後の、そして最大の sin であったのだ。そこに見られる Dombey の罪の実態については Edith が「彼は彼自身の独自の価値観に」のっとなって「金の威力」に任せて「自分を買った⁽²⁴⁾」のだと推測しているとおり、Edith との出会いからほんの数週間で彼女との結婚を決めた Dombey の側の独特の思惑にあるのである。そして Scrooge と似た人生態度を貫きながらも Dombey は Scrooge のものよりもはるかに複雑かつ深刻な罪を犯し、それに見合う重たい罰を受けるのである。

4

Dombey は Edith と出会った瞬間に認めた Edith の美貌に目を奪われ、そして Bagstock 少佐が言及した Skewton 母娘の高い血筋 (blood) に気を引かれている⁽²⁵⁾。しかしそれらにも増して Dombey に Edith との結婚を直接決意させたのは Edith と会ってまもなく Dombey の中に生まれた次のような感慨であった。

Dombey 氏は先妻に対しては冷たく尊大な傲りの中で自分自身はつきりわかるほど彼女とかけ離れた「存在」として身を処してきた。彼は彼女に最初に会った時から共にいる時はいつでも「Dombey 氏」であったのであり、彼女が死ぬ時も「Dombey 氏」であった。彼はその結婚生活を通じてずっと自分の偉大さを主張してきたのであり、そして妻もまたそれを従順に認めていた。彼は彼の玉座の頂点に座し、彼女は最下段のつましい自分の持ち場を守っていた。そして自分の中の一つの観念にただ独りつながれて生活するのは、自分に利すること何と大であったことよ。この二番目の妻の誇り高き特質は彼自身の偉大さに寄与し、それと溶け合いその偉大さを更に高めてくれるものと思いつこんでいた。彼は Edith の高慢を自分の威厳に追従させて、自分がこれまでよりもなお更傲然としている様を思い描いていたのであった⁽²⁶⁾。

言うなれば Dombey は金の力に任せて Edith が頭のとっぺんから足先まで帯びているその pride (傲り) あるいは haughtiness (尊大さ) を買い取ったのである。そうした pride とか haughtiness は Edith に「日毎夜毎煉獄の苦しみを与えてきた⁽²⁷⁾」ものであり、Edith はこれまでもそれらを「笠に着て、自らの運命と戦い挑み抗してきたのであった」が、その運命が Dombey の手に握られた今、戦い挑み抗う対象は Dombey の中に具体化され、そのようにそれまで発露を見い出せないまま Edith と焦熱地獄に陥れていたもろもろの感情は激情となつてまずは母の Skewton 夫人に、そして夫である Dombey 氏本人に向かって迸り出るのである。ところが一方で結婚を明日に控えた Dombey 氏の Edith に対する思いは次のようなものであった。

Dombey 氏は胸中その美しい婚約者の物腰に苦言を呈するどころではなかった。彼は連れの中に見られる尊大さや冷淡さに共感する十分な根柢があったのだ。Edith の場合これらのものは彼に一步譲り、自分のものとかけ離れた意志は何も持たないであろうと思つてほくそえんでいた。この誇り高く堂々とした女が我が家の儀礼を取り行ない彼自身のやり方に従って客人達を冷やかにもてなす様を思い描いてほくそえんでいた。「Dombey 父子商会」の威厳はそのような手の中では必ずや高められ、うまく保たれていくに違いない⁽²⁸⁾。

つまり humanity の一切を失くし、「Dombey 父子商会」そのものになり切ってしまっている Dombey 氏には人間 Edith は全く必要ではなく、Edith は「商会」を飾り輝かせるために、旅の途中で思いがけずも彼が見い出した又とない掘り出し物であったのだ。Dombey は彼にそれほどの共感 (sympathy) を感じさせたからには Edith もまた「商会」に象徴される自分と同じ類の人間以外の何者でもなく humanity など生きていく上での邪魔でしかないと思っている者の一人であると思うひとりよがりな判断に固執し、そのことに内心大きな喜びを感じているのである。それで Edith がそこに到るまでどんなに激しい内面的葛藤を経て来たか、そして今後 Dombey という己の戦うべき具体的な的を得てどのような攻撃に出るかなどということに思いを致す由もない。そのため、自分が疎外し、邪魔物として排除しようとしてきた愛と真の権化である娘 Florence と会うやその傲り高ぶる Edith が示した、よもやと思われるような Florence への明白な愛と友情に、Dombey 氏は少なからぬショックを感じている。それは Edith もまた自分と同じ傲りと尊大さだけにこの世の価値を置いているものとしていた確信が、いきなり覆ったことへの極めて苦々しい思いであった。それは Edith の中には Florence の人間性を認めそれを敬愛する心、つまり Florence に共感する心、死に向かう先妻が彼女をひしと抱きしめていた時に通い合っていたその心、死んだ Paul が父親である自分よりもベッドサイドに一番求めていた心、自分にとってはうとうとしく苦々しいという他にはないその心と通い合うものが確かにあり、Edith はそちらの側の住人になることへのより大きな憧憬があることを認めた Dombey 氏の、危機感を伴った苦々しさであった。

一方 Edith は Florence に会うや、母ゆえにそれまでついぞ我身に認めたことのない Florence の持つ「若さ」や「真」や「純真さ」に対して、自分の中に俄に開眼するものを感じて、それに無類の価値を置いている自分に気付いたと共に、Florence の中にそれまでついぞ知る由もなかった唯一「戦っていない自然の自分」でいられる情緒的な砂漠のオアシスを見い出したのであった。そして母も弟も亡くし悲しく寂しくやるせない思いに堪えかね、同じ思いをしているに違いない Dombey 氏との間に愛を通わせようと近付いて行っても「いらぬ子」としていつも疎外されていた Florence に、Dombey 氏に無価値どころか邪魔物とされた暖い人間性を Edith はしっかりと認め、自己の内部から自然発生的にわきでるそれに呼応する十分な感情を Florence に示し、そればかりかそれをこの世の中での至上のものとして崇め奉る清らかな humanity を Florence にのみ一挙に回復するのである。そして Edith はそれまで臆にしかわからなかった心の中の大きな葛藤の実像を初めてはっきりと知ることになる。つまり Edith に心理的に七転八倒の苦しみを与えているその葛藤はこの人間性が非人間性に侵害されまいとする自己の内的な格闘にあったのだ。しかし Edith が 12 歳の Florence と共に居ることの中で得られる、これまでの 28 年間の人生の中で初めて見つけた安息の空間も、Dombey 氏の禁止にあい、Florence をはじめ、Edith、それに Dombey 氏自身の不幸はどんどん深まっていくことになる。

つまり Dombey 氏は Edith との結婚において息子の Paul を死に追いやった罪と全く同じ罪を犯しているのである。Dombey 氏は息子の Paul の死の原因が Paul がもたらす「Dombey 父

子商会」の更なる威信にのみ目を奪われて、まだ幼い Paul への情容赦のない紳士教育にあったことに全く思いを致すことなく、Paul によって目論見の外れた商会の威信を、Edith を自分の身辺に侍らせることによって、Paul の存在以上に高めることに寄与する何よりの装飾物としようとしたのである。人を自分の唯物的な価値観で動かそうとすること自体に大きな無理が生ずることは明白なことであり、humanitarian である Dickens には、そうした Dombey の行為はこの上もない sin であったのだ。そして Dombey は Paul の死の段階でその罪に気付くべきであったのである。幼い Paul は死によってしかその父親が我身に与えた苦痛から逃れ、そしてその罪を糾弾することはできなかった。しかし Edith は 28 歳の堂々たる女性である。Edith からんでは二人の罪人がいるが、Edith は Dombey との結婚が或るや、この二人の罪人である Skewton 夫人と Dombey 氏とに対する罰として、二人に破滅をもたらす大いなる戦いを展開することになるのである。

5

Edith はまず次のように言って Florence に近付きたがっている Skewton 夫人から Florence を遠ざけることを画策する。

「ねえ、お母さん」Edith は…切り返した。「私が戻って来るまで必ず一人にいるのよ」
「お前が帰って来るまで絶対ここに一人でいなくちゃならんかね、Edith」彼女のお母さんはくり返した。「さもなくば明日私がかくも本心を偽りかつ恥辱にみちて明日私がすることを御覧なさるその御名にかけて、教会であの男の手を絶対に拒んでやるから。でなけりゃその場で倒れて死んでしまった方がいいわ」
母親はぎょっとした表情を浮かべたが、彼女の視線がかち合ったその目の威力にたじろがざるを得なかった。「私達が今の私達でいるだけでもうたくさんよ」Edith はたんたんと言った。「私は他のどんな若さも真実も今の私ほどにまで引きずり下させやしないからね。私はどんな純真な心根も舐んだり損なったりゆがませたりなんかさせやしないから。それも世の母親たちの娯楽を楽しむようにされたんじゃないわ。私が言ってることの意味、母さんにはわかるわよねえ。Florence は必ず家に帰らせますから」

……

「私は今夜という今夜そんなことを言われなくちゃならんのかい。辛苦してこれまでやって来たのにねえ。それも私のおかげで立派に一人立ちできるようになるうって言うこの時に」彼女の母親は激情にかられて、ほとんど金切り声を上げんばかりで言い、震える頭は木の葉のように揺れていた。「私がただただ腐り果て墮落しているからって、若い娘の相手には向かないって言うのかい！ じゃあお前はどうかんだよ。一体のお前はどうかんだよ？」

「……ああ、お母さん、お母さん、もしあなたが小さな子供だった時に—— そう Florence よりもっと小さな子供だった時に—— 私の自然な心 (natural heart) を私に残しておいてくれさえしたら、私は今頃どんなふうだったかしら」

Skewton 夫人は今ややっとな Edith が Dombey 氏のような London の the greatest man と結婚できるようになった自分の境涯を両手を広げて受け入れるなどということは一切なく、むしろそういう人生を目標に娘を導いてきた自分の方針を Edith が蔑み呪っていることを我が身に

しっかりと知ることになる。目的を持って彼女なりに Edith を切磋琢磨して教育して来て 70 歳を越し、いよいよその成果が問われる時が来た時の Edith にぶつけられた上記の引用の中にある非難の言葉は、一生をふいにしたような空しい挫折感となって Skewton 夫人を襲ったのである。Edith が Dombey のような富と地位と名誉の 3 拍子揃った人に嫁ぎ、自分もその栄光に浴し、大満足で余生を送れる筈であった Skewton 夫人の老後は、この Edith の言葉と、後の Edith の Dombey 氏との争いの中で、それまで想像だにしなかったほどの陰惨なものになっていく。

Skewton 夫人は失意のうちに卒中に襲われ、周囲の認知が混濁する中で、今ややっとなりと自尊心とか対面などの鎧を脱ぎ捨てた、母と子の間にある原初的な愛を Edith に速二無二求めようとするが、それすらも当の Edith に拒絶されるのではないかという恐怖に常に脅えている。そして上言の中で “We are going home soon; going back. You mean that I shall go home again⁽³⁰⁾.” という Skewton 夫人の言葉に、70 年余りの全人生を懸けて甘い汁に誘われてたどり着いたゴールの中に隠れていた、それまで予想だにしなかった苦汁への彼女の失意の大きさを感じるのである。「家に帰りたい」ということは、つまりまだゴールをめざして駆けている状態に戻ることに、最愛の娘 Edith が自分の理想通りの娘として常に傍らに存在し彼女をそのような Lady に育てた母の誇りと満足感に浸って過ごしていた Edith の Dombey 氏との結婚前の過去に戻ること、せめて Edith との良好な関係が保たれていた過去に戻りたいということなどを意味し、この言葉はそうしたもろもろの思いが今わの際にある Skewton 夫人の口をついて出た極めて象徴的な言葉として理解することができるのである。つまり Skewton 夫人の悲哀は Edith の愛を失なると実感したことの中にあり、従ってその悲哀からの救済は Edith に許されそして再びその愛を取り戻すことにある。混濁した意識の中でも Skewton 夫人はそのための最後の手段として “For I nursed you!⁽³¹⁾” (「おまえに乳をあげたのはこの私なんだよ!」) と Edith に訴える。Skewton 夫人はそこには何の嘘偽りも存在しない極めて自然な、母から子への母性に Edith の気持を引きつけることによって最後の最後に Edith を生まれたばかりの自然で汚れのない幼児の時に思いを到らせ、それまで気付くこともなかった胸の奥深くに沈んでいるかすかな、母と子の間にある切っても切れない愛の絆を Edith にたぐり寄せさせることに成功したのである。そのレベルでなら Edith は母を許すことができたのだ。しかし Edith には自分に対して罪を犯したものとして、更にもう一人 Dombey 氏という大物がその背後に控えていたのだ。母親とは半ば和解が成り関係の修復を誓った Edith ではあったが、その直後の母の死にも涙一つ見せなかったのは、もはやどうしようもないほど凍てつき渴き切った Edith の内面の故であり、そしてそういう Edith に Dombey 氏一人にターゲットが絞られた今これから始まろうとしている Edith が挑む戦いの激しさの予感を感じるのである。というのは Skewton 夫人はもはや 70 歳過ぎという “死” の陰が常につきまとっていた高齢者であって、また Edith とは母と子という基本的には「自然な」関係にあり、Edith と母との休戦・和解は自然発生的に意外に簡単に起こり得る可能性を常に秘めていたのである。しかし Dombey 氏と Edith とは互いの愛によって結ばれた夫婦ではないし、Edith は彼らの結婚生活の最初から Dombey を戦いを挑む相手としか考えていなかったのである。そして Dombey 氏もまた、高慢・尊大な Edith を夫婦の契りによっ

で自分の配下に置き、従属させようとしていたのであるから、Dombey もまたある意味で Edith との戦いに挑む意味があったのだ。そういう二人に和解や停戦などとうてい期待はできないのである。そして彼らのその戦いは、激しさもさることながら女性であるという本質的な自然性を内在させている Edith に勝ち目があり Dombey 氏の敗戦の予感があるのであって、それはまた、Dombey 氏が「Dombey 父子商会」を体現しているからにはその「商会」自体の崩壊の予感ともなるのである。

6

Edith の Dombey 氏への挑戦は、Skewton 夫人の存命の時からもはや始まっていて、Skewton 夫人の卒中は、いや増して激しくなっていた彼らの対立を目の辺りにしたことが引き金になったようだ。Skewton 夫人も Edith と Dombey 氏との結婚が、自分の生来の夢の実現であった限りにおいて、よもやそのようなものになろうなどとは思ってもよらないことであったのと同様に、見るからに他を侮蔑し傲り高ぶっている Edith を London の biggest man の妻の座と引きかえに自らに従えることができたとしたら、自分がどれほど周囲の人の目になお一層傲然かつ偉大に見えるかということへの喜びと期待の中にあつた Dombey 氏もまた Edith に「金に糸目をつけない⁽³²⁾」 London 界隈きっての裕福な妻の称号を与えたにもかかわらず、Edith が彼の言うことごとくに傲然と刃向かい、彼らの日常のことごとくに傲然と立ちはだかるなどいうことは夢想だにしなかったことであつた。Edith が結婚によって、愛などの精神的なものは求めず、ただ裕福で高貴で lady の暮らしを手に入れることを目標にしていた Skewton 夫人の下で育てられ、いざその母の目標通りそれを約束してくれる人と結婚できたからには、Edith には Dombey 氏の持てるお金を意のままに使い、誰に気兼ねすることもなく意のままに生活することが許されてしかるべきではないかという彼女なりの大義名分があつたのだ。それで Edith は何枚ものまばゆいばかりのドレスを自室の床に無造作に放り、足蹴にされた財宝の中からダイヤモンドや金銀の装身具でさらに飾りたて、夜な夜な London の社交会に馬車で出掛け深夜に帰宅する日が続けているのである。さながら Dombey 氏の金を食い尽くそうとする妖怪のようになってしまっている Edith の耳に、Dombey 氏の注告など届きはしない。その基盤に愛の大前提を欠いた結婚の契りの脆弱さはそもそもの初めから明白なものであつたのであり、結婚後の Edith の Dombey 氏との争いにおいては何ら相手に求めるものを持たず従つて恐ろしいものは何もない Edith の方に勝ち目があることは明白である。しかしその Edith の内心の思いは Dombey 氏の尊大さをますます煽ることになり、Dombey 氏が気難しく頑なで陰質な性格は更に度を増した。その Dombey 氏の内面について Dickens は本文の中で次のように記している。

このような鎧を身に纏う者はまた、もう一つの懲罰をはらんでいるものだ。それは和解とか愛とか信頼など寄りつかせもしない。外部からのあらゆる優しい同情、信頼、愛情、それにあらゆる情など物ともしない。しかし自愛に深く一突き刺されるとなると、銅に対する裸の胸ほども脆弱である。そこでは

他のどの傷よりも、その鎧われた倨傲の手で鎧われぬままに打ち捨てられた倨傲を打ちすえたようにずきずきと痛むのだ。……常に傲り強力であるはずなのに、最も強力であるべきところで卑められ無力にされるのが彼の運命であるように思われた⁽³³⁾。

Edith の尊大さに刺激され、それまでにも輪をかけて陰気で頑迷で不機嫌になった Dombey 氏に Edith もまたますます尊大な態度で対することになるのである。しかし覇者であらねばならない Dombey 氏は、あくまで Dombey 氏の妻たる栄ある身分を与えたという英断を盾に Edith との徹底抗戦に出る。その時 Dombey 氏に立ち向かい、一步も退くことのなかった Edith の言葉は次のようなものであった。

「結婚以来あなたは私にとても横柄にふるまってこられました。ですから私も私がされてきましたとおりにお返して来たのです。あなたは私にそして周りの者皆に、あなたとの結婚で私は誉高く名高くなったと思っていられることをお示しになってきました。私はそうは思っておりません。でも私達はお互いに別の道を歩いていくより他はないということをお分かりになっていない、というか（あなたのお力からして）そうするおつもりもないようですね。それどころかそのようなこと計うはずもない忠誠の宣誓を私にお求めになりますのね」

……

「私にはあなたへの優しい気持ちなど何にもありません。それはご存知でしょうが、私の気持ちがあるか、あなたはいつでもよいことなのですね。私だってあなたが私に何の思いも抱いていられないことはよく知っています。……」

……

「……もしあなたがあなたの方で忍んでみせるとお約束下されば、私もまた耐え忍ぶことをお約束致しますわ。私たちほど不幸な夫婦はいませんわ。別々の理由からではありますが、結婚を祝福しあるいはそれを正当化するあらゆる心情が根絶やしにされているのですもの。でも時がたつうちに何か友情のようなもの、あるいは又適合性のようなものが私達の間には芽生えるかもしれないじゃないですか。もしあなたの方でもそういう努力をして下さるのでしたら、私もそうなるように望みをかけることをしますわ。そして私は若い頃と娘盛りを過ごしてきたその過ごし方よりも、より良いそして幸せな年の重ね方があるのではないかってそれを楽しみに待つことにします⁽³⁴⁾」

それに対する Dombey 氏の返答は次のようなものであった。

「君はもはや私の考えや期待についてわきまえているのだし、その類のことに妥協したり話し合ったりするなんてとても容認できないよ、君。私は君にはもう最後通牒は言い渡してあるのだし、ただ君がそれに細心の注意を払うことを望むだけだ」……「私は自分が正しいと思う方針をとらせてもらうから、いかね君、誰が何と言おうとそんなことおかまいなくねえ」……「私は君がしかるべき義務感と妻としてよりふさわしい気持ちを自らの内にかきたて、より良い思慮分割を持つようになることをただ信じるばかりだ」

つまり Dombey 氏は Edith に自分への従順 (obedience) と夫に対する妻としての義務の意識 (sense of duty) とを求めたのであった。しかしこれらは Edith にとって何と不得手な事柄であったであろうか。そして上記の引用文に見られるようにこれらの Dombey 氏の Edith に

対する願望は実現不可能であるばかりか Edith の感情を更に逆なでするものであることは明々白々であるのに、heartless である Dombey 氏にはこのような Edith の心の内などわかろうはずはない。Dombey 氏と Edith の結びつきは、富、名声、地位、体面などに基点が置かれ、当時は人が社会で生きていく上でそれらは大変重要視されていたのであったが humanitarian であった Dickens の目から見れば“不自然”なそして不自然がゆえに罪悪とみなされるものを基盤にしていて、love とか humanity の、人間の“自然”性にのっとったものではなかったことに、その絆の弱さがあつたのであり、そのことについては読者と Edith が十分にわかっている。Dombey 氏のみが全く気付かないところに Dombey 氏の罪深さと彼の運命の悲劇性があるのである。Dombey 氏は Edith との関係を改善するために、社交界から深夜に帰宅した Edith を思い切って部屋に訪ねたのであったが、ただただお互いの思いの格差を確認したに過ぎず、この話し合いを機会に彼らの関係は更に汚泥にはまってしまうのである。 次号に続く

注

- (1) George Edith : 1819-80 英国の女性小説家 本名 Mary Anne Evans. *Odam Bede, Mill on the Floss, Middlemarch* など名作多数
- (2) 「イギリス文学史」(斎藤勇 昭和 39 年 6 月 25 日 研究社出版株式会社) p443
- (3) 「オリヴァ・ツイスト」(下) (岩波文庫, 1989 年 4 月 訳者・本田季子) 解説
- (4) これは Dickens 自身が最初俳優になろうとした素質からくるものであろう。後に Dickens は一人ですら作品の朗読劇を行ない、アメリカまでも出かけ好評を博した。
- (5) *Barnaby Rudge* : 1841 年 (29 歳) Dickens の長編歴史小説・週刊誌に連載
- (6) Margaret Thatcher : (1925-) イギリスの政治家。1975 年保守党党首。78-90 同国初の女性首相。強硬外交とマネタリズムに基づく経済対策を展開 90 年辞任
- (7) 『ディケンズとともに』小池滋著。 1983 年 2 月 株式会社晶文社 p125
- (8) *Great Expectation* : 1860 年 12 月 1 日号から雑誌に連載
- (9) *Dombey and Son* : Everyman's Library 240 chap I *Only One Drawbaek*
- (10) capitalism : 商品経済の広範な発達を前提に、労働者を雇い入れた資本家による利潤の追求を原動力として動く経済体制。資本家が生産手段を私有し、労働力以外に売るものを持たぬ労働者の労働力を商品として買い、労賃部分を上回る価値をもつ商品を生産して利潤を得る経済。封建制に次ぎ現れた経済体制で、産業革命によって確立された。往々にして唯物的人間観を生み、Dickens はそのような人を作品の中で多く描き、彼独自の判断でそのような人間観に凝り固まった人を罪人として糾弾する。
- (11) 『世紀末までの大英帝国』(1987 年 4 月, 法政出版, 長島伸一著) p129
- (12) Friedrich Engels : (1820-1895) ドイツの革命家、思想家。Marx と科学的社会主義を創始し、「ドイツ-イデオロギー」「共産党宣言」と共同執筆。また Marx の『資本論』第 2, 第 3 巻を整理・刊行。著「反デューリング論」「空想より科学への社会主義の発展」「家族・私有財産・国家の起源」など
- (13) この London 商人については当学紀要 31 号 (2008 年 2 月) と 32 号 (2009 年 2 月) の「*A Christmas Carol* について」の筆者の論文の Scrooge の姿として詳細に述べてある。*Dombey and Son* の中の Dombey もまた Scrooge と同様に唯物的な物の視方しかできずに、Dickens によって sinner あるいは captive とされているが Dickens の意識の中では Dombey の罪の方が Scrooge よりもはるかに大きく、また深刻な扱いとなっている。これは Scrooge が子供のお話として描かれた物語の主人公であるのに比べて Dombey は大人の、むしろ悲劇的な story の深刻な運命を負った主人公だからであろう。

- (14) *"Dombey and Son"* chap. I
- (15) *Ibid* chap. III "Girls are thrown away in this house, Mrs. Richard, I assure you."
- (16) "perfect Dombey"
- (17) Florence は Paul の乳母と彼女自身の maid に連れられて街に出、迷子になり Brown 婆さんに身ぐるみはがれて放免され、「Dombey 父子商会」の雑役をしていた Walter に助けられて結局 Walter と結婚することになる。Uncle Sol はこの元気で気のいい甥の Walter と一日も離れて暮らすことはできないと思うほど Walter を愛している。
- (18) 19C 半ば頃の一般的な考え方の中に子供を大人と異なるレベルにあるものという考え方はなく、労働においても社会においても子供は「小さな大人」でありまた Dombey 家のような家の息子、Paul は「小さな紳士」と考えられ特に Paul の教育は Paul の幼さには余りこだわらずに厳しいものであった。
- (19) Paul が教育を受けた Doctor Blimber の寄宿学校で、Paul は Miss Blimber の下で寸分のゆとりもない厳しく忙しい教育を受けることになるが、そこでの教育について、本文では次のように記されている。「当時の富裕層の子供が行った学校とは、その子供が早くより立派な紳士になってもらいたい、そうしてもらえらるなら金はいくらかかってもかまわないと効をさせる保護者の見栄と虚栄とに裏付けられたものであった。」
- Dombey and Son* chap. 12
- Miss Blimber が特に Paul に厳しく当ろうとしていたとか、Doctor Blimber が若き紳士達皆を苛酷に勉強させようとしていたとかということではない。Cornelia (Miss Blimber) は自分が受けてきた教育の信条をただ守っていたに過ぎず、博士は考え方に部分的にいくらか混乱はあるものの、その若い紳士達をもはや皆が博士であるかのようにみなし、そしてまた、生まれながらにしての大人であるとみなしていたのだ。この若い紳士達の近親者の喝采に意気軒高にして、彼らの盲目の虚栄と浅薄な性急さからられて、Doctor Blimber が自らの過ちに気付くとか、風をはらんだその帆を調節し、他の進路をとるなどということは極めて奇異なことであったのだ。 p155 chap. X II
- (20) 法廷の裁きに訴えることのできない、Dickens 自身の裁定による罪人。
- (21) *Dombey and Son* chap. X X I
- (22) *Ibid* chap. X X VIII "Look at me", she said, "who have never known what it is to have an honest heart and love. Look at me taught to scheme and plot when children play....." p368
- (23) *Ibid* chap. X X VII p367
- (24) *Ibid* chap. X X VII
- (25) *Ibid* chap. X X I
- (26) *Ibid* chap. X L p521
- (27) *Ibid* chap. X X X p394
- (28) *Ibid* chap. X X X p399
- (29) *Ibid* chap. X X X p403
- (30) *Ibid* chap. X L I p542 「もうすぐ私達家に帰るのよねえ。お家にねえ。もう一度お家に帰るんでしょ、おまえ」
- (31) *Ibid* chap. X L I p543
- (32) *Ibid* chap. X X X V p465
- (33) *Ibid* chap. X L p521
- (34) *Ibid* chap. X L p528